

C- I -35 終末期 NPPV 使用について

新日鐵八幡記念病院看護部 林真理

【はじめに】

1995年から10年間にNPPVを施行した321名の患者の内、気管挿管の適応がないと判断した患者は43名で全体の13.4%であった。その中でも2000年以降にNPPVも中止し酸素投与のみへと切り替えた患者が10名いた。

【当施設の気管挿管不適応基準】

1. 患者本人が気管挿管を希望していない。2. 原疾患の治療が困難であり、医師の説明に対し家族が気管挿管を行わないことに同意している。3. 家族が患者の状態をみてきて今以上の治療、延命を望んでいない。

【目的】

2000年以降にNPPVを中止した10名について検討する。

【方法】

カルテおよびICU記録より検索する。

【結果】

年齢：75.5 ± 4.3(70~81) 歳。性別：女性 3 名 男性 7 名。疾患：肺炎 3 名、心不全 2 名、神経筋疾患 1 名、悪性新生物 1 名、脳挫傷 1 名、慢性呼吸不全急性増悪 1 名、呼吸不全 1 名。NPPV 使用時間：53.1 ± 45.8(3 ~ 131) 時間。NPPV 中止から死亡までの日数：4.7 ± 2.4(0 ~ 9) 日。

NPPV 中止理由：患者本人の拒否 2 名、患者

および家族の拒否 1 名、NPPV 施行中の問題 5 名（呼吸が合わない、不穏、不快感、嘔気、嘔吐、鼻翼の潰瘍形成、喀痰の増加など）、病状の改善が望めず家族の同意を得ての中止 2 名。

【考察】

NPPV 中止の主な理由として、NPPV 施行中の問題が原因で続行不可能なため中止した 5 名と、病状の改善の見込みがなく NPPV の継続でトラブルの発生が予測でき中止した症例 2 名の計 7 名は従来の医療者による中止の決定であった。今回注目したいのは、患者および家族が NPPV 継続の中止を申し出た 3 名である。気管挿管をしていれば明確な意思表示ができず、また容易にコミュニケーションをとることができない。

しかし、NPPV 施行中は患者が自分の予後について家族と話し合うことができ、またその時間が確保できると考える。さらに、NPPV 中止の申し出が2000年以降に出始めたことは、社会的にも医療情報が容易に得られるようになったことで、医療への関心が深まったこと。それに伴い医師の言われるがまま治療を受け入れるのではなく、患者および家族が意見を言えるようになったことで、治療法を選択でき、ひいては呼吸管理の中止を受け入れる素地ができたと考える。

【結語】

NPPV の使用は患者および家族の治療に対する決定権を保証する可能性がある。